トップ対談 38

組合員・地域とともに

都市型ＪＡの起点は都市農業・農地の保全にあり(下)

ゲスト／岩坂嘉邦（兵庫県ＪＡ加古川南 代表理事組合長）

第38回ゲスト

兵庫県ＪＡ加古川南 代表理事組合長
岩坂嘉邦

いわさか・よしくに
1959年兵庫県生まれ。1989年1月平岡町農業協同組合に入組。同年10月の合併により現在の加古川市南農業協同組合となり、平岡支所、別府支所、尾上支所にて主に、渉外、金融共済の業務に従事する。土山支所、平岡支所で支所長を経験後、2008年営農経済部長。2014年常勤監事、2017年代表理事常務を経て現職。水稲を中心に受託も含め2.5haを耕作する。

×

●インタビューとまとめ
三重大学名誉教授
京都大学学術情報メディアセンター研究員
石田正昭

いしだ・まさあき
1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『ＪＡ女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』（ともに編著、家の光協会刊）。

＊前回の記事はコチラから

都市型ＪＡの起点は都市農業・農地の保全にあり

小さなＪＡは組合員と経営トップ層との距離が近く、組合員の声や要望が経営トップ層へつながりやすいという特徴がある。それだけに土地・建物の有効活用や手厚い配当施策は重要な意味を持っている。今回は、本ＪＡの経営施策の特徴について、小学生への『ちゃぐりん』の寄贈や「くみあい保育園」の運営などの地域貢献活動を含めて、岩坂嘉邦組合長に語ってもらった。

内部留保も、組合員への還元も

石田：総代会資料によると、令和５年度の剰余金処分は、出資配当金が出資金に対して４％、事業分量配当金がファーマーズ（野菜等）販売額に対して５％、出荷米１袋（30kg）に対して100円、定期貯金（平残）に対して0.06％となっています。手厚い還元といえます。

岩坂：ファーマーズでの販売や米の出荷への配当は、始めてから３年になります。これらとは別に、令和５年度は肥料高騰対策として、肥料費の一部助成を行いました。

出荷いただいた米（ひのひかり）は当ＪＡが全量買い上げ、全量販売を行っていますので、より有利な価格で買い上げています。また、出荷米に対しても事業分量配当での支援を行っていますので、農家の所得向上に結びついています。農地が少ないので、数量的には年間で5,000袋程度にとどまりますが、その全量を当ＪＡ管内で販売しています。

配当金の総額は、出資配当金が2,000万円余り、事業分量配当金がおよそ8,000万円で、事業分量配当金のほうが大きくなっています。わたしどもの特徴は、この事業分量配当金を「利用券」でお渡ししていることです。事業を総合的にご利用いただくことによって得た収益を組合員に還元していくことを目的としております。利用券の使用期限は発行から３か月間で、直売所、営農経済セン

出荷された米はＪＡが全量買い上げ、全量販売している（左）。事業分量配当金を「利用券」で渡し、ＪＡ直売所や営農経済センターなどでの利用を促している

2023年10月に金融窓口と直売所を併設した一体型の尾上支所がオープン。利用者の利便性が向上した

ターのほか、加古川市や姫路市の協力業者である百貨店でもご利用いただけます。

石田：いいアイデアですね。利用券はいつ頃から始めたのですか。

岩坂：合併翌年の1990（平成2）年からです。利用券を6支所で色分けして、どこの支所の券がどこで利用されたかを確認できるようにしています。

石田：芸が細かいですね。話は「組合員資本」に移りますが、出資金に対する組合員資本が約20倍になっていて、「超」が付くほど財政基盤が安定しています。長年にわたって「内部留保」に努められてきた結果です。

岩坂：出資金5.4億円に対して、組合員資本は91.7億円ですが、有価証券運用の金利リスクを考慮するともう少し内部留保を積んで組合員資本を100億円以上にしたいと考えています。

石田：内部留保も、組合員への還元も、ともに充実しています。一方で、投資も重要です。この本所は立派な建物ですし、平岡支所や直売所と一体型の尾上支所も改築されました。ただ、本所隣接の営農経済センターはちょっと古くなっていますし、改築の必要な支所も残っているように感じました。

岩坂：そのとおりで、今後は別府支所、北野支所の改築が課題となっています。ＪＡとしては、単純に建て替えるのではなく、土地・建物の有効活用を頭に入れながら将来計画を描かなければなりません。

　これまでも平岡支所の奥にある旧倉庫は地元企業の物流拠点にご利用いただいていますし、主要道路に面した土地はコーヒーチェーン店に定期借地でお貸ししています。その地代等は年間4,000万円を超え、事業外収益の大きな柱の一部となっています。

石田：それはすごいですね。

岩坂：その他に、保有資産の有効活用として平岡支所管内に2カ所ほど定期借地の物件がありまして、大手薬局チェーン、飲食店チェーンにお貸ししています。

石田：確かに損益計算書を見ると、事業外収益が1億5,000万円近くあって、大きな収益源となっている

ことが分かります。これからのＪＡ経営では、自らが事業を興すというよりも、今ある土地・建物をどう生かすかという点に目を向ける必要がありそうですね。

岩坂：ＪＡが建物を建てて貸すという方法もありますが、その場合はＪＡ本体ではできませんので、子会社の設立が必要となります。

▌『ちゃぐりん』を小学４年生全員に寄贈

石田：こちらでは農会の活動が活発です。管内にいくつありますか。

岩坂：37農会です。農会長会には常時30人以上に集まっていただいていますし、12月には農会長・理事監事合同視察研修会（1泊）も行っています。役員等の改選時には、総代・理事の推薦をいただきますし、その他にも広報誌・カレンダーの配布や肥料・農薬などの予約購入での取りまとめもお願いしていますので、農会と農会長に対してそれぞれ助成をさせていただいています。また、農地やため池・水路の維持管理もしっかり行ってもらっています。

石田：都市化の影響を感じさせませんね。ただ、都市化という点では、尾上地区には女性会がありません。これはどうしてでしょうか。

岩坂：尾上地区の女性会は「解散」ではなく、「休会」の扱いとしています。尾上地区では主業的農家が減ってしまい、女性会の役員をされる方がいないことや平日の日中の活動に参加できる方が少なくなったことが影響しています。女性会活動をやりたいという方からの声があれば再開する予定です。

石田：なるほどね。農協の伝統はしっかり守るという姿勢が伝わってきます。農協の伝統を守るという点では、『ちゃぐりん』の管内小学４年生全員への寄贈も本ＪＡの特色のある地域貢献活動の１つです。

岩坂：令和６年度の地域貢献活動として取り組みました。管内には12の小学校があって、これまでも各校１冊ずつ配布していましたが、今回は『ちゃぐりん』創刊60周年を記念して、希望された学校の４年生全員に夏休み前の８月号を配布しました。夏休みに開かれる食農教育活動や、夏休みの宿題に活用してもらおうと考えました。

2024年7月に管内の小学校に『ちゃぐりん』を寄贈（計1120冊）。地域貢献活動の一環で、子どもたちの夏休みの自由研究などに生かされた

石田：学校側からはどのような反応がありましたか。

岩坂：総合学習の授業でＳＤＧｓをとりあげた小学校が『ちゃぐりん』の食品ロスの記事を使った例や、「ハンドメイドクラブ」の特集で掲載されていたスイカのうちわや風鈴の記事を使って夏休みの課題を提出

したり、自由研究として掲載メニューを参考にリンゴやマシュマロ、チョコなどを使った各国のカレーを作ったりした生徒もいました、といった報告を受けています。

石田：令和7（2025）年度はどうされますか。

岩坂：具体的にはまだ考えていません。反響が大きかったので、できれば継続したいと考えています。総代会前に開催している地区別総代懇談会で、「『ちゃぐりん』はとてもいい本だ、子どもたちが見るのにちょうどいい」と発言された総代さんがおられました。

ＪＡでは『ちゃぐりん』を活用した「ちゃぐりんフェスタ」を開催。子どもたちに食と農の魅力とたいせつさを伝えている

　また、「農業に関することもいろいろ掲載されていて、子どもたちのためになるが、各学校に1冊ずつでは誰も読まないぞ」と発言されたことがありまして、今回その要望に応えることができました。

石田：家の光協会が泣いて喜ぶようなお話です。

定年退職者や新規就農希望者、出荷者らを対象にした「アグリスクール」が好評。農作業の基本を学び、将来的に直売所出荷などの農の担い手育成をはかる

岩坂：その方は、もともと中学校の先生をされていた方なので、『ちゃぐりん』をもっと読む運動をＪＡが広げていかなければならないとお考えになったのだと思います。

▌地域に寄り添う「ふれあい活動」「くみあい保育園」

石田：こちらの「アグリスクール」は、子どもを対象とするのではなく、直売所出荷者を育てる取り組みになっています。

岩坂：そのとおりです。2009（平成21）年から始めていますが、これまでに多くの出荷者を育ててきました。受講生は定年退職者や女性が多く、それもまったくの非農家ではなく、農地をお持ちの自給的農家の方々が多く参加されています。

石田：ＪＡの地域貢献活動に含まれると思いますが、こちらの「ふれあい活動」はすべての支所で取り組まれています。

岩坂：そのとおりです。内容的にも徐々に充実し、現在はすべての支所で地域活動団体等とコラボした活動が実現できています。

そのなかでも規模の大きな取り組みとしては、平岡支所の「寺田池クリーン作戦＆さつまいも作り・収穫体験」への参加と苗助成、尾上支所の「しおかぜ遊イング」の参加と食材提供があげられます。

「寺田池クリーン作戦＆さつまいも作り・収穫体験」のケースでいいますと、同じ植え付け・収穫体験であっても、作物によって参加者の人数に差が出ます。さつまいも作りはもっとも簡単といわれており、体験できる機会も多いことから、参加者はあまり増えませんが、トウモロコシ、エダマメ（黒豆）の収穫体験になると、参加者が一気に増えますので、今後は作物シフトも必要だと感じています。

しおかぜ遊イングのケースでは、加古川市のボランティアグループ「松風会」が主催するイベントに、ＪＦ（漁協）、ＪＡなどが協賛する形で参加しています。障がい者施設や作業所、特別支援学級の子どもたちが、各団体と協力して加古川河口のクリーン作戦を行い、その後、数隻に分かれて尾上港から船に乗ってクルージングを楽しみます。最後に参加者全員で交流会を開くという企画ですが、その交流会に当ＪＡが食材を提供しています。

すべての支所で取り組んでいる「ふれあい活動」。野口支所では「野口まつり」を実施（左）。尾上支所ではクルージングが好評

石田：なるほどね。この種のイベントはＪＡ単独というよりも、地域活動団体等とコラボするほうが人と人とのつながり、あるいは地域での拡がりという面で、規模も影響力も違ってきますね。

話は変わりますが、新装された尾上支所のお隣にＪＡの「くみあい保育園」があります。今日の午前、そこを訪問したのですが、これも地域貢献活動の１つに入ると思います。

岩坂：1968（昭和43）年４月１日に旧尾上農協が開設したものです。当時は人口急増の時代で、幼稚園・保育所の定員が不足していたことから、地域の要望に応えるとともに、食農教育の意味合いを込めて保育園事業を開始しました。給食も行っていますので、米や野菜の提供も行っています。

卒園生が成長して、ＪＡの職員になったり、母親となって、自分の子どもを通わせたりする方もいます。保護者には当ＪＡの組合員になっていただき、保育料納付のための口座を開設してもらいます。卒園後は出資の脱退ができますが、実際に脱退される方は少数です。

くみあい保育園ではクリスマス会や音楽会を開催。米飯完全給食も大きな特徴であった

ＪＡの総合事業のなかで運営していますので、独立採算制を強く打ち出しているわけではありません。ただ、コア事業とはいえない面もあって、保育園の運営に積極的に関わってきたかというと、必ずしもそうではありませんでした。公立の小・中学校の校長を経験された園長先生にお任せしてきたというのが実状です。

今回、苦渋の経営判断となりましたが、「歴史的使命は終わった」という結論を下しました。2025（令和7）年度をもって、在園生の卒園を見届けてから50年以上の歴史の幕を閉じます。少子化による園児の減少だけでなく、認可外保育所であったことや、施設の老朽化が進み、改築に多額の費用を要することが大きな要因でした。今後は、保育園事業からは離れますが、食農教育をはじめ地域の子どもや次世代との接点づくりに力を入れていきたいと考えています。

（取材／2024年10月30日）

農協の保育事業
ＪＡ加古川南「くみあい保育園」の位置づけ

保育理念に「たくましいからだ　ゆたかなこころ」を掲げ、自由な発想と社会性を育む保育を重視してきた

昭和30年代後半ころから、女性の就労率の増加や幼児教育に対する要望の高まりから、保育ニーズが急激に高まっていった。これを受けて、農協の託児所、幼稚園、保育園の設置が進んでいった。

しかし、昭和50年代に入って、自治体を中心に社会福祉法人や民間等による保育施設が充足されたことで、農協の託児所はその役割を終えた。現在も存続しているのは幼稚園、保育園である。

ＪＡ共済総合研究所の『共済総研レポート』2015（平成27）年12月号に、福田いずみ研究員が「農協の保育事業～生活インフラ機能としての今日的ニーズ～」と題して、2013（平成25）年4月現在の「農協立の幼稚園・保育園一覧」を掲載している。

それによると、農協立の幼稚園・保育園の総数は7園である。その内訳は幼稚園5園、保育園2園であるが、ＪＡ加古川南の「くみあい保育園」を除くと、幼稚園は学校法人、保育園は社会福祉法人へ経営移管された。その点からいうと、本ＪＡの「くみあい保育園」の場合、児童の入園条件（組合員の子弟であること）を緩和することが難しかったため、認可外保育所から認可保育所への移管の時機を逃したことが悔やまれる。

園長先生をはじめ保育士・調理師の方々のお姿や、保護者と園児たちの元気な様子は『家の光』2017（平成29）年10月号の中日本版「農業体験も給食も充実　くみあい保育園」から知ることができる。